

カンボジア日本人材開発センター（CJCC）における
日本語コースと文化交流プログラム

Japanese Language Course and Culture Exchange
Program at Cambodia-Japan Cooperation Center

モック・ピセイ

MORK Pisey

はじめに

カンボジアでは、一九七〇～一九七九年にわたる内戦によって国の政治・経済が混乱し、教育においても、学校は破壊され閉鎖され、多くの教員や生徒が亡くなった。一九九一年に「パリ和平協定」が締結されてからも、国内の情勢は危険な状態が続いた。一九九八年に総選挙が行われ、ようやく安定を迎えたばかりである。西側諸国及び日本政府からの援助を受けて、カンボジアの復興は少しずつ進んでいる。

日本政府による「ODA無償資金協力」の「人材育成奨学計画」では、毎年、行政に関わる公務員や一般の学生を対象に、日本の大学への留学を支援し、留学中の生活費や学費などを供与している。この制度によって育成された人材は、帰国後、国の開発に貢献できる能力をもち、カンボジアと日本の架け橋となることが期待されている^①。

筆者もまた、約五年間にわたって、「カンボジア日本人材開発センター（略称CJCC）」に常勤の日本語講師として勤務し、この計画によって日本に留学させていただくことができた。CJCCは、カンボジア政府と日本政府の合意のもと、二〇〇四年に独立行政法人国際協力機構（略称JICA）と王立プノンペン大学の共同プロジェクトとして創設された。グローバル化に対応して経済・社会等の諸分野の専門的・技術的な知識を備えた国際的な知識を有する人材の育成と、両国の相互理解の促進を目的として設立されたものである^②。現在、CJCCは、①ビジネス人材育成、②日本語コース、③

文化交流プログラムという3つの柱を中心に事業を展開している。二〇一四年から現在まで、②日本語コース、及び③文化交流プログラムの運営には、「国際交流基金（略称JF）」が支援を続けている。

CJCCは、二〇一五年以降、東南アジア諸国の日本センターの中で、最も高く評価されている組織である。その証左として、毎年、東南アジア諸国の日本センター担当者が数多くCJCCを訪問する。視察に訪れた各国の担当者は、CJCCが日本語学習者や一般人に向けてさまざまな学習環境を整備し、イベントを運営し、サポートしていることを高く評価し、その運営方法や情報を積極的に開示し共有していることに深い信頼を寄せているのである。

各国の高い評価は、当センターの真摯な運営と活動に基づいている。例えば、月に一回、全スタッフの会議が丸一日かけて行なわれる。現場スタッフの意見を聞き、改善案を検討する。また、スタッフの能力向上を目的として、日本語及びビジネス人材の育成やスタッフ研修を無料で実施している。筆者も、日本語コースの課題を解決するため、タイや日本など、海外の日本語教育に関するセミナーや研修に参加した。こうした経験を通して、日本語教育の現状を理解するとともに、日本語教師としての今後の課題を自覚することができた。

本稿では、日本ではあまり知られていないCJCCにおける①日本語コースと、特に筆者が携わってきた②文化交流の概要を紹介し、カンボジアにおける日本文化教育の向上を検討するための礎とする。

一、CJCCにおける文化交流プログラム

CJCCは、ビジネス界における人材育成を実施するとともに、カンボジアと日本の相互理解、及び友好関係を強化する場としてさまざまな活動を展開している。表1はCJCCにおけるカンボジアと日本の相互理解に関する主な文化交流を整理して示したものである^③。

*表1・CJCCの文化・教育活動

	内容	実施日程	料金(USD)	詳細
1	カンボジアに進出する日本企業を対象とした、カンボジア社員への研修の実施。	カンボジアの祝日を除く。	研修の内容・期間に応じて対応。	カンボジアに進出する日本企業に勤務するカンボジア社員を対象とし、次の内容の研修を実施する。具体的な内容は相談可とする。 ・ビジネス関連の基礎知識 ・日本語の基礎(あいさつなど) ・日本人のビジネス慣行
2	日本語の書籍を備えた図書館。	カンボジアの祝日を除く、隔週の水曜日。	レンタル会員 16USD/年。 学生割引あり。	日本語の書籍を中心に、洋書、クメール語の書籍を備えた図書館を開放する。
3	文化イベント。	年二回実施。 ①七月頃。 (二〇二二年度未定) ②二月頃。 (二〇二二年度未定)	入場無料。	在カンボジア日本大使館、国際交流基金アジアセンターと共催で、文化イベントを開催する。 ①2月「絆フェスティバル」。 CJCCの会場で実施。

■絆フェスティバル

「絆フェスティバル」は、在カンボジア日本大使館とCJCCとの共催で、二〇一二年に初めて開催された。二〇一七年からは、新たに国際交流基金アジアセンターが加わり、在カンボジア日本大使館・CJCC・との三機関共催として実施されている。「絆フェスティバル」は、日本とカンボジアの両国の伝統文化を紹介する最大のイベントであり、四日間にわたって開催される。参加費は無料である。日本語学習者のみならず、一般の子供から年配者まで、幅広い年齢層の人々が訪れて、毎年、大盛況である。

日本文化に関する体験講座は、①折り紙、②いけばな、③茶道、④武道(合気道・柔道)、⑤浴衣の試着体験等である。筆者の実体験と共に、CJCCの担当者に聞き取り調査を行った事項を加味し、その概略を紹介しておく。

①折り紙、②いけばな、③書道の体験講座は、専門家の講師ではなく、研修を受けたカンボジア人大学生のボランティアが担当する。三つの講座は、三日間とも同じ大教室で行われている。講座の時間は一〇時～一六時まで

ある。参加者数は、例年、一日に五〇人から一〇〇人である。

④茶道の講座は、「絆フェスティバル」の二日目に行われる。JFの専門家(裏千家茶道講師)が担当する。参加者は定員五〇名なので、事前に予約する必要がある。大学生のボランティア二名が客を案内したり、会場の準備などのお手伝いをする。参加者は、専門家が薄茶を立てる様子を見学し、薄茶をいただく体験をする。

⑤武道(合気道・柔道)はJACAの支援のもと、二〇〇二年から現在まで継続して行われている。現在では、地方都市を含めて二〇カ所の道場を有するまでに普及している。CJCCは、カンボジア合気道協会と協力し、「絆フェスティバル」で合気道の模範演技を行い、体験会も実施している。講師は合気道三段と柔道四段の日本人講師である。合気道クラブに所属している学生たちが、参加者の稽古をサポートする。

この「絆フェスティバル」は、カンボジアの新聞やテレビでも毎年放映されており、日本とカンボジアの友好イベントとして、国内でも大変有名になっている。

二、CJCCにおける日本語コース

CJCCには「国際交流基金」から専門家の日本語教師が派遣され、教材として『まるごと日本』と『まるごと日本』を使用し、「日本語コース」が開講されている。

二学期制で、前期にあたる「お正月学期」は四月開講、後期にあたる「お盆学期」は十月開講である。平日の昼休みと夜間を中心に、次の三コースを開講している。

①初級から中級までの『まるごと日本』と『文化』コース

②短期のビジネス日本語コース

③企業委託コース

日本語コースのスタッフは、二〇二〇年十月現在、常勤講師はカンボジア人教師三名、日本人教師四名（常勤三名、国際交流基金派遣専門家一名）である。

学習者は、毎学期③企業委託コース等も含めて、五〇〇名前後にのぼる。

その内訳は、①『まるごと日本』と『文化』コースの受講者は首都プノンペンに在学中の学生、③『企業委託コース』の受講者はカンボジア銀行に勤めている銀行員である。

CJCCは、日本語の学習者と日本語教師になる人材も育成している。②のように、日本語が話せる人材が必要な企業のための人材育成も担っている。また、日本の生活・文化を知りたい、より深く理解したいという学習者もいる。こうした幅広い学習者のタイプやニーズに対応するために、CJCCはさまざまな日本語コースを開講している。

(一)『まるごと日本』と『文化』コース

現在、初級から中級までの『まるごと日本』と『文化』（以下、『まるごと』コースと略称）が開講されている。表2は、CJCCにおける日本語プログラムの授業内容を整理したものである。

*表2・CJCCの日本語コースの内容

『まるごと』初級コース		コース名	内容	期間・時間割
初級M3	初級M2			
①ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。	①ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。	入門M1	①ひらがな、カタカナ、簡単な漢字の読み書きができる。 ②自分や他人の紹介、住んでいるところ、知り合い、持ち物などを質問したり、答えたりできる。	朝・昼・夜 二〇一九年四月～九月 二〇一九年十月～二〇二〇年三月
①ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。	①ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。	初級M2	①ひらがな、カタカナ、簡単な漢字の読み書きができる。 ②自分や他人の紹介、住んでいるところ、知り合い、持ち物などを質問したり、答えたりできる。	朝・昼・夜 二〇一九年四月～九月 二〇一九年十月～二〇二〇年三月
①ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。	①ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。	初級M3	①ひらがな、カタカナ、簡単な漢字の読み書きができる。 ②自分や他人の紹介、住んでいるところ、知り合い、持ち物などを質問したり、答えたりできる。	朝・昼・夜 二〇一九年四月～九月 二〇一九年十月～二〇二〇年三月

その他		『まるごと』中級コース	
CJCC運動会	運動会を通して、日本の学校で行われる運動会を味わってもらおう。	年一回	三時間
CJCCの日本語スピーチコンテスト	カンボジア日本語スピードコンテストの前に、CJCCの学生向けのスピーチコンテストが行われている。CJCCから本選に出場する学生の意識を高め、同時に学習結果を発表する機会を増やす目的がある。	年一回	二時間
ひらがな・カタカナコース	『まるごと』コースの新学期開講に先立ち、主に新入生準備のため開いた八日間の文字コースを開講する。	年二回	二時間
日本語教師研修会	①日本語教師研修会を年3回実施 ②日本語教師研修会では日本語講師の関心のテーマを取上げて行う。	年四回	未定
文化日本語講座	日本の文化、ポップカルチャーなどを紹介し、その中で使われる日本語を学び、体験する。	不定期	未定
中級M5・中級M6	③個人的に関心のある身近な話題について、簡単なテキストをつくることができる。経験、出来事、夢、希望、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。	昼・夜 二〇一九年四月～九月 二〇一九年一〇月～二〇二〇年三月	昼十二：一〇～十三：四〇 夜十八：〇〇～十九：三〇 週二回・全四〇回
中級M7(前半)	①中級M5・M6を終えた学生が、より高度な日本語を使い、各種表現を学ぶためのコース。	昼二〇一九年四月～九月	昼十二：一〇～十三：四〇 週二回・全四〇回
初中級M4	①簡単な日常的範囲なら、情報交換に応ずることができ ②仕事、学校、娯楽といった身近な話題について、標準的な話し方であれば概要を理解できる。	昼・夜 二〇一九年四月～九月 二〇一九年十月～二〇二〇年三月	昼十二：一〇～十三：四〇 夜十八：一〇～十九：三〇 週二回・全四〇回

(11) 『まるごと』日本語「初級コースの現況と改善策」

『まるごと』日本語「初級コース」には、入門M1・初級M2・初級M3という三つのレベルがある。各レベルには独自のシラバスがあり、中間テスト・期末テストがある。使用教材は、『まるごと』と日本のことばと文化の「活動編」と「理解編」の二つのテキストである。授業時間は九〇分、各クラスの担当教師は日本人二名とカンボジア人一名である。一クラスの受講者は二五名である。表3は『まるごと』日本語「初級コースの現況の詳細内容」をまとめたものである。

*表3・『まるごと』日本語「初級コース」

コース名	受講者数	クラス数	コース修了の評価
入門M1	二〇〇名程度	八クラス	筆記テスト…三〇% 会話テスト…三〇% (ロールプレイング十五%、 作文発表十五%) 宿題提出率…二〇% 出席率…二〇%
初級M2	一五〇人程	六クラス	同上
初級M3	一〇〇人程	四クラス	同上

『まるごと』日本語」初級コースの受講者数は二〇〇名程度と、非常に多い。この数字は、CJCCの日本語コースが高く評価されていることを裏付けている。

学習者が各コースの修了証書を得得するための修了評価ポイントは、CJCCによる統一した指針のもと、極めて詳細に定められている。授業体制や学習環境も整備されている。初級レベルの段階から、自然な日本語を聞く経験をもたせるために、日本人教師が授業を担当する。テキスト以外の使用教材として、スライドショーやCDプレーヤーなどを用いることで、興味・関心を促す工夫をしている。

CJCCは、精緻なカリキュラムと良好な環境のもと、目的に応じた日本語習得を提供する教育施設として整備を進めてきた。しかし、最も基本となるべき『まるごと』日本語」コースは、目下、大きな問題に直面している。それは、途中で受講を辞めたり、登校しなくなったりする学習者が少なくないことである。初級レベルの受講者も、徐々に減少していることが確認された。

その原因は何であろうか。

第一に、受講生の大半は、さまざまな専門分野を専攻する大学生や社会人である。そのため、勉強や仕事と並行して、持続的に日本語を勉強していくのは容易なことではない。

第二に、受講者数に対して、開講クラス数が足りない。そのため、一クラスの学習者数が二五名を超えるクラスもある。学習者に対して、教師の数が絶対的に少ないのである。授業中、教師の細やかな指導を受けていない学習者もいたかもしれない。

このような問題を解決するために、CJCCは次のような改善策を実施している。

第一に、毎学期末に、日本語学習に関する「修了アンケート」を行う。日本語コースに関する感想や、教師から何をもらいたいかといった内容である。アンケート結果から、例えば、「教師の説明が少し早い」、「日本語の文字（ひらがな・カタカナ）を覚えきれなかった」といった事情が認められ

た。

第二に、教師たちの研修会を開催することである。常勤講師たちは、センター内で週に二度、勉強会を行っている。カンボジア人教師や日本人教師が模擬授業を交代で行ったり、教授法を共有することで、授業中の改善点や注視点などを話し合う機会として効果的に機能している。

第三に、「ひらがな・カタカナCatch Upクラス」の開設である。初級コース入門M1日本語の勉強を始めた学習者や、初級M2の学習者の中で、「ひらがな・カタカナは学んだが、まだ確実に活用できていない学習者」を対象に、「ひらがな・カタカナCatch Upクラス」を開講した。担当教師は日本人とカンボジア人教師二名である。授業内容は、まずはじめに、クラスメートやカンボジア人教師たちと、ひらがなやカタカナの勉強法を情報共有する。また、カンボジア人教師が日本語を学び始めた頃の経験談を話すなどして、受講者に親身に寄り添っていく。その後、楽しく覚えられるよう、ひらがなとカタカナのゲームをして練習する。学習に不安を感じていた受講生は、こういったアプローチによって、学習意欲を取り戻すことができた。

「ひらがな・カタカナCatch Upクラス」は、たいへん有効である。この授業を通して、受講者が日本語を続けて学ぼうという学習意欲を維持し続けることを支援していきたいと考えている。

(三) 『まるごと』日本語」中級コースの現況と改善策

『まるごと』日本語」中級コースには、初中級M4・中級M5（前半コース）と、中級M6（後半コース）・中級M7（前半コース）という三つのレベルがある。

教材は、初級コースと違って、『まるごと日本のことばと文化』一冊のみを使用する。

授業の回数は、週に二回（火・木）、授業時間は九〇分である。四月から九月まで、合計四三回のカリキュラムである。

表4は、CJCCにおける『まるごと』日本語」中級コースの現在の詳細な内容である。⁸⁾

*表4・「まるごと」日本語 中級コース

コース名	受講者の人数	クラス数	担当教師の人数	コース修了の評価
初中級M4	二五人	三クラス	四名(日本人二名、カンボジア人一名)	筆記テスト…二〇% 会話テスト…二〇% 作文発表 …二〇% その他…宿題提出二〇% 出席率二〇%
中級M5 中級M6	十四名	二クラス	四名(日本人二名、カンボジア人一名)	同上
中級M7	六名	一クラス	四名(日本人二名)	同上

中級レベルになると、学習者の日本語能力をより一層向上させるために、初級レベルとは違った環境作りをしなければならない。担当教師は、日本人がメインとなる。週二回だが、授業中に使用する主要言語を日本語にする。ここで、「話す能力」の向上をめざす。

使用教材『まるごと日本のごとばと文化 中級』には、「昔話、好きな漫画、小説のストーリーをメモにまとめて長く話す」という日本語のタスクがある。学習者は、グループ・ワークで一生涯懸命にタスクに取り組み、自主的にミニ発表をする。その成果として、クラスメイト同士のグループ・ワークを通じて、新しい発見や日本語の勉強になることが多いというコメントが届けられた。

しかし、表4に示したように、受講者数・クラス数は減少傾向にある。中級レベルに上がると、授業についていけなくなる学習者が多くなるのである。M4から、順次M7に昇級するまでのあいだの途中脱落者数の割合は、九割減にも達している。

その理由として、第一に、学習者は週二・三回の通学であるため、CJCCに所属しているという帰属意識が低い。第二に、学習成果を発表する機会が授業以外にないため、日本語学習に対する当初のモチベーションが保てない。そのため、途中で日本語の学習を辞めてしまう結果となり、進級を断念してしまっていると推測される。

この問題を解決するために、次のような活動を実施した。
第一に、二〇一五年から現在にかけて、受講生のためのふたつのイベントを実施した。

ひとつは、CJCC内での「日本語スピーチコンテスト」である。毎年、カンボジア国内では「カンボジア日本語スピーチコンテスト」が行われている。しかし、二〇一四年まで、CJCCはこの「カンボジア日本語スピーチコンテスト」の本選に出場するどころか、予選に応募する学習者すらいなかった。そこで、「カンボジア日本語スピーチコンテスト」に先立って、CJCC内での「CJCC日本語スピーチコンテスト」を企画し、「先輩の部」と「後輩の部」に分けて実施している。

その結果、二〇一五年には十一名の学習者が「カンボジア日本語スピーチコンテスト」に応募し、一名が本選に出場を果たした。

ふたつめは、「遠足」である。クラスメイト間、教師と受講生間の親睦と信頼を深める人間関係づくりのため、CJCC内外で「遠足」を実施することになった。単なる娯楽ではなく、日本の「運動会」のような活動を取り入れようということになった。日本のように秩序立った「体育」の授業があるわけではないので、整列練習をしたり、グループで話し合いをもつなどとして準備した。

第二に、CJCC所属の専任教師たちの知識と技能向上のために、勉強会

や研修を行った。専任教師は、「まるごと日本のことばと文化」の新版テキストに合わせた授業準備に追われて多忙である。そこで毎週勉強会を開き、中級レベルを中心に教材研究をしている。カンボジア人教師にとっては、中級レベルの教授法や日本語の知識向上を図ることのできる最適の機会となっている。

第三に、副教材を新たに作成した。非漢字圏の受講生にとっては、漢字の学習が最も困難であり、漢字の習得を抜きにして日本語の文法を学習することは容易ではない。そこで、クメール語訳付の「漢字練習帳」を作成した。また、受講生の落ちこぼれを少しでも減らすこと、文法重視の学習観を持つ学習者のニーズにも対応するために、クメール語版の文法解説書を作成した。

(四) CJCJCにおける「日本の文化とことば講座」

「日本の文化とことば講座」は、二〇一七年の後期にあたる「お盆学期」に初めて設置された国際交流基金独自の講座のひとつである。通常の日本語コースとは別に、日本の「文化」と「ことば」を同時に学ぶための講座として、不定期に、およそ一学期に一回程度開講している。

担当教師は、日本人教師がメインである。また、カンボジアのさまざまな分野で活躍している日本人ボランティアを招いて授業を行う。カンボジア人の教師たちは、通訳・アシスタントとして参加する。講座の内容は、担当教師が作成した授業計画をもとに、日本人専門家とその他の教師たちが内容を検討したうえで決定する。

現在までに実施した「日本の文化とことば講座」の概要は表5のとおりである。

「日本のことばと文化講座」の受講者アンケートでは、非常に良い評価・感想が寄せられた。例えば、「日本の文化は、多様であり、素晴らしい文化だと思う」「もつと様々な漫画を読みたい」「合気道クラスに通いたい」といったものであった。

このような「日本の文化とことば講座」での啓発活動によって、受講生の

*表5・「日本の文化とことば講座」の実施概要

回数	テーマ	学習内容	時間
1回目	「日本のお正月」	お正月のときに、どんなことをやるのかを紹介する。例えば、神社やお寺へ初詣に行ったり、おせち料理を紹介する。	2
4回目	「くみひもで学ぶ日本語」	映画『君の名は。』に出てくる組紐にフォーカスを当て、組紐にまつわることばと登場人物のセリフを学び実際に組紐を製作する。	2
5回目	「武道の紹介」	柔道と合気道の起源や発祥の地を紹介し、健全な心身の育成を目的とすることを説明する。また、ロサンゼルス五輪金メダリスト「山下泰裕」柔道選手の紹介や、合気道の模範演技を見せたり、合気道の稽古を実際に体験する。	2

日本語学習への意欲・興味関心は確実に持続する。これをさらに深化させる体制作りが必要となる。

二〇一三年、JICAの支援のもと、カンボジアに「日本武道館」のような武道道場が建設された。その道場は、「合気道クラス」や「空手道クラス」などを開く際に使われている。「日本のことばと文化講座」の受講生や日本人講師、そして、筆者も「合気道クラス」に通い、修練に努めた経験がある。そこで合気道の「入身」と「転換」の体捌きや、呼吸力から生まれる技を稽古した。心身の錬成を図り、練習生同士が切磋琢磨する大切さを学んだ。

日本文化を活用して日本語を学ぶ「日本の文化とことば講座」は、今後さらに多様な分野を導入することで、広範に発展する可能性がある。特に、さまざまなメディアを活用した日本文学の紹介を通して、学習者が日本人の心情や文化に触れる貴重な経験を行うことが期待される。

むすび

CJCJCの設立には、カンボジア国の発展を支える人材育成や、日本とカ

ンボジア両国の文化理解を促進する目的があった。CJCCの活動を通して、両国の友好関係は深まり、今後もなお進展していくことと思われる。

その一方で、未だ多くの課題も残されている。次世代を担うカンボジアの若者たちに、日本の文化やことは、日本のビジネス界により深く関心を持ってもらえるように、今後も当センターの活動に協力していきたい。そして、CJCCの「まるごと日本のことばと文化」コース、「日本の文化とことば講座」のさらなる充実をはかり、さまざまなメディアを活用し、宮澤賢治の作品を手始めに、日本の文学作品を、わかりやすく効果的に日本語教育のなかに取り入れていきたいと考えている。

注

- (1) 日本国外務省「日本のODAプロジェクトカンボジア無償資金協力案件概要」(二〇二一年三月)。
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/data/gaiyou/odaproject/asia/cambodia/contents_01.html#3102
- (2) 独立行政法人国際協力機構(JICA)「ODA「見える化」サイト」日本・カンボジア人材開発センター建設計画」(二〇〇四年六月)。
<https://www.jica.go.jp/oda/project/0404900/index.html>
- (3) 独立行政法人国際協力機構「カンボジア日本人材開発センターの各種コース表・その他サービス」(二〇一四年四月)。
https://www.jica.go.jp/japancenter/cambodia/course_others.html
- (4) 「カンボジア日本人材開発センター」教育文化副長タン・ヴァティスレイリック氏の御教示による(二〇二二年二月十六日‘Zoom’)。
- (5) 独立行政法人国際協力機構「カンボジア日本人材開発センターの各種コース表・その他サービス 日本語コース」(二〇一四年四月)。
https://www.jica.go.jp/japancenter/cambodia/course_japanese.html
- (6) 同右。
- (7) 「カンボジア日本人材開発センター」日本語・日本文化部部长チューブ・ナディ氏の御教示による(二〇二二年一月二五日・ZOOM)による

聞き取りにて)

(8) 同右。

(9) 同右。

〔附記〕本稿を成すにあたって、藏中しのお先生、佐竹保子先生、安保博史先生、吉田慶子先生、相田満先生、三田明弘先生、杉山若菜先生、笹生美貴子先生から貴重な御指導をたまりました。ここに記して、深く御礼申し上げます。